

鬼と女神の握手

あの柔らかな骨格と

柔らかな筋肉から

鬼のような意思と自信が

どのようにして迸り出るのだろう

砕け散る氷の霧で

温かい真綿の褥を整え

胸をときめかせつつ

大歓声の後に

声を失った観客たちで

競技場は変形しそうだ

静と情熱

沈黙と歓声

戦いと安らぎに

一八〇度の振幅で身を震わし

鬼と女神とが握手をし、抱きあって揺れている

全会場に羽毛と微笑の渦を振り撒き

どよめきが一瞬沈黙に代わる

あなたは、今覚えていますか

黄金色の舞が始まる前の

躍動する自らの血に対する

誓いなのか

それとも

血の滲む残酷な約束なのか

腹の前に硬く組まれた秘かな合掌

あなたの自信と無心の合掌をしていたことを

あの瞬間に

僕は、弓弦は勝つ、必ず勝つと、信じた

こんな確信は、僕の人生で初めてだった

鬼と女神が握手をした瞬間だった

一瞬、僕は

僕であることをやめていた

(2018・2・16)